

やまと 民俗への招待

もまて 民俗への招待

茶粥第3弾。これまで東大寺の風変わりな茶粥と一般の茶粥を紹介した。では、この茶粥の起りはいつごろからだろうか。

起源については諸説がある。その一つは、東大寺大仏造立に、庶民が米を食い延ばして協力したというものである。幕末の農学者で『広益国産考』などの著作で知られる大蔵永常は「大和は農家にても、一日に四五度宛茶粥を食する也、聖武天皇の御宇、南都大仏御建立の時、民家各かゆを食し米を喰のほし

て、御造営の御手伝ひをしたりしより、専らかゆを用る事と云伝ふ」（『日用助食竈の賑ひ』）と伝えられている。少量の米と茶汁で炊く茶粥は確かに米の節約だったが、聖武帝の大仏造立の詔「二枝の草、一把の土」にひかれてか、粥でしので大仏造立に協力したという説が民間に流布していたようだ。

また、奈良市西御門町の墨屋に生まれ、マレー語大辞典の編纂やエスペラント語の普及にも活躍した宮武正道



東大寺の転書門。景清は頼朝暗殺を3度企て、失敗に終わったという＝筆者提供

32（昭和7）年に刊行している。それには平家の残党惠七兵衛景清が、大仏殿再建の落慶供養に参詣する源頼朝を討とうとして大門の二階に隠れていた時、大食漢だった彼が胸がつかえてしかたがなく、茶を入れた粥を炊いたところ非常に腹具合がよかったのが始まりだという説を紹介している。景清という伝説的武将が潜んだのは転書門だとされ、この門は一

名「景清門」とも呼ばれている。前者は食い延ばし、後者は消化の良さから始まったとするが、ともに東大寺がらみであることは興味深い。

茶粥がお水取りの夜食に食べられることから、その歴史も修二会と同じく1200年以上とする食文化研究者がいるが、修二会で茶粥を食っているから、茶粥の歴史も同じとするのは、極端な三段論法というべきだろう。

（奈良民俗文化研究所代表・鹿谷勲）

茶粥 大仏造立起源か